

**Citation:** Al-Ani MZ, Davies SJ, Gray RJM, Sloan P, Glennly AM,. Stabilisation splint therapy for temporomandibular pain dysfunction syndrome. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2004, Issue 1. Art. No.: CD002778. DOI: 10.1002/14651858.CD002778.pub2.

**CRG名:** Oral Health

## [最新版\(英語版\)はこちら](#)

**英語版最終改訂年月:** 4 November 2003

**Clib issue No.;** N/U: 2008 issue 1; -

**背景:** 疼痛機能障害症候群の一般的なものは顎関節症である。顔面部の関節・筋の疼痛、顎関節機能異常、筋筋膜疼痛症候群、顎頭蓋機能異常、筋筋膜疼痛などの多くの類義語が存在している。疼痛機能障害症候群の発症原因は多因子であり、多くの異なる治療法が提唱されている。

**目的:** 疼痛機能障害症候群患者の症状の軽減におけるスタビライゼーションスプリントの効果を確認する。

**検索戦略:** データベース(Cochrane Oral Health Group Trials Register; Cochrane Central Register of Controlled Trials(CENTRAL); Cochrane Library issue 2, 2003; MEDLINE; EMBASE)をサーチした。関連雑誌はハンドサーチを行い、引用文献を検索した。また、この分野の専門家に未発表論文を尋ねた。発表演語の制限は付けなかった。

**選択基準:** スプリント治療と無治療、他のスプリントまたはその他の治療との比較を行っているランダム化割り付け試験あるいはそれに準ずる試験を選択した。

**データ収集と分析:** データの抽出は独立して、2人のレビューアが行った。論文の正当性の評価はデータ抽出時に行った。意見の食い違いに関しては話し合い、3番目のレビューアに相談した。必要であれば、著者に連絡した。試験は治療方法と経過観察期間によりまとめられた。

**主な結果:** 20のランダム化比較試験が認められた。8の試験が除外され、12が残った。スタビライゼーションスプリント治療が針治療、ナイトプレート、バイオフィードバック、安静療法、下顎運動療法、咬合接触のないスプリント、最小限または無治療と比較された。

疼痛機能障害症候群患者に対して、スタビライゼーションスプリントは他の治療法と比較して、有意な効果は見られなかった。疼痛機能障害症候群患者にスタビライゼーションスプリントを使用することは、無治療と比較して、自発痛や圧痛の疼痛強度を減少させるのに効果があるという弱いエビデンスが得られた。

**レビューアの結論:** 顎関節症患者に対するスタビライゼーションスプリント治療に関して、使用するべきである、または使用しないほうが良いということに関して、十分なエビデンスは得られなかった。患者配分、結果の解釈、大きなサンプルサイズ、十分な観察期間などを考慮した、良く練られたランダム化比較試験が必要であることがわかった。疼痛機能障害症候群に対する治療結果の標準化はランダム化比較試験で評価されるべきである。

(翻訳 松香芳三・監訳 湯浅秀道; JCOHR)

翻訳公開日: 08年4月1日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点があれば、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。